

有明海漁業実態調査

あんこう網漁業の漁獲状況調査

大渡 功晟

あんこう網漁業は潮汐を利用して、網を固定したまま魚介類を漁獲する待受網の一種である。操業時の網の恰好が魚のあんこうが口を開けた姿に似ている(図1)のでこの名称で呼ばれている。以前は佐賀県で80隻を超える船が操業していた¹⁾が年々減少傾向にある。今回、操業日誌によりあんこう網漁業の年間を通した漁獲状況について取り纏めたので報告する。

方法

調査は、あんこう網漁業を営む漁業者に操業日誌を配布し、令和5年1月～12月にかけてのシバエビ、シラタエビ、エツ、ワラスボ、その他の魚種の漁獲状況と操業場所について記入を依頼し、月別に結果を取りまとめた。

結果

主な操業場所は図2に示したように、六角川河口域、筑後川河口域、塩田川河口域、沖合域であった。特に、六角川河口域での操業が多く、令和5年は全操業日数の80%を占めていた。

潮汐を利用した漁法であるため、潮流が速い河口域で操業されることが多く、その日の操業場所を決めると場所を移動することなく干潮または満潮まで同場所で操業するため、操業場所は限られている。潮汐の差が大きい大潮前後で、また、満ち潮より引き潮で操業することが多い傾向がみられた。

図3に令和5年におけるあんこう網による月別、魚種別、操業域別漁獲量を示す。漁獲状況を見ると、ほぼ周年を通じて漁獲されているが、令和5年においては7月上旬から12月下旬までビゼンクラゲ漁や休漁等のため、アンコウ網による漁獲がない時期があった。

魚種別にみると、1月はシバエビの漁獲量が多かった。2～4月はエツ、8～9月はシバエビの漁獲割合が高い傾向がみられた。なお、その他の種類については、フグ類、スズキ、チヌ、ボラ、ヤスミ、マナガツオ、エイ類、ベイカ、ガザミ等であった

操業海域別にみると、塩田川河口域はシラタエビの漁獲割合が約4割、沖合域はシバエビの漁獲割合が約10割近

くと高い傾向がみられた。一方、六角川河口域はシバエビ、シラタエビ、エツ等多種多様な種が大きな偏りがなく漁獲されていた。

文献

- 1) 片岡千賀之(2007)；戦後のあんこう網漁業の展開、長崎大学水産学部研究報告(88), p119-135.
- 2) 佐賀県有明水産試験場「有明海特産魚介類漁業の振興に関する研究」昭和60年3月, p13-20
- 3) 野田進治・佃政則(2021)；有明海漁業実態調査(アンコウ網漁業の漁獲状況調査), 令和3年度佐賀県有明水産振興センター業務報告, p12-13.

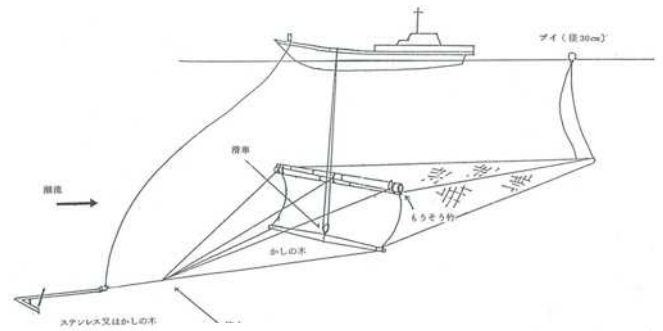


図1 あんこう網漁業の構造図



図2 あんこう網漁業の主な操業場所

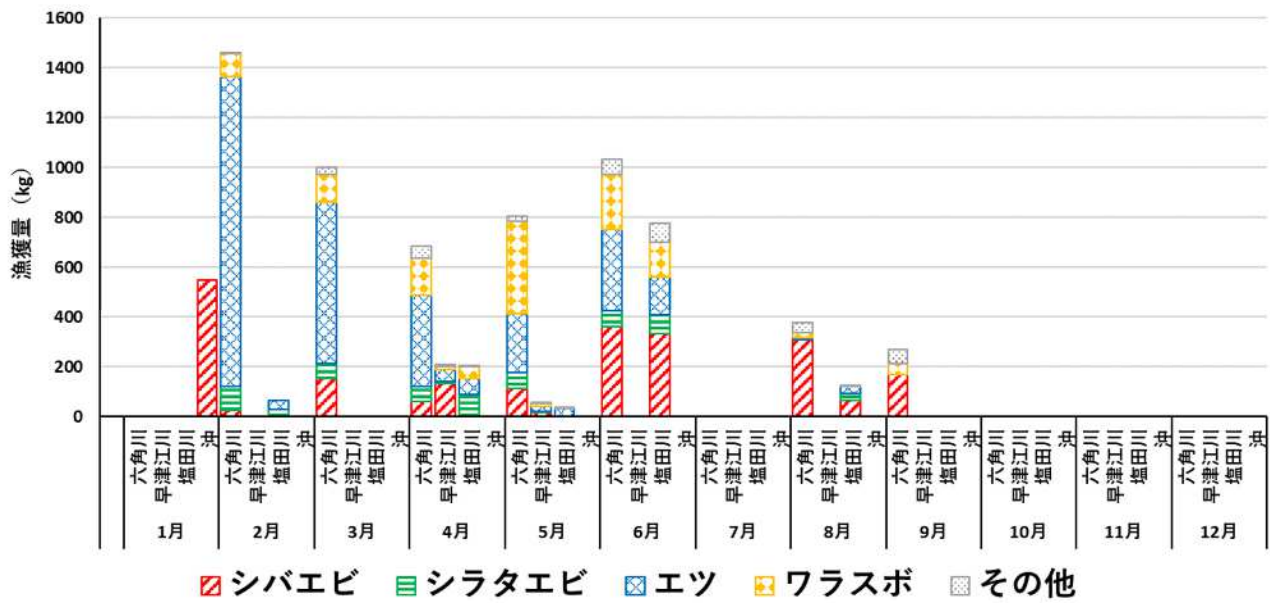


図3 令和5年におけるあんこう網漁業の月別魚種別操業域別漁獲量